



「銅製玉子焼き鍋製作で受講生は生き活きと」

兵庫センター
(兵庫職業能力開発促進センター)

頃末 寛

今日、わが国の経済は好況であるという。そこに至った大きな要因は、モノづくり機運の醸成と維持を図ったことが日本経済を回復させた鍵であったと、新聞をはじめとするマスコミの論調は力強い。他方で、このような経済好転の波はフリーターから正業へと希望する若者にとってもチャンスであり、彼らに技能を付与できる職業訓練実施施設で働くわれわれにとっては嬉しい限りである。しかしながら、キーボードは打てるがやすり一つ満足に使える多くの受講者を見るにつけ、幼い頃から「肥後の守」等を使うチャンス等もなく育てば、これも仕方ないかとも思う。それにしても、当節実施されている職業訓練内容はモノづくりの原点ともいえる訓練科数は減少する一方であり、それらを鍛え上げる場が少ない現状に対して、何がモノづくりの時代だ！とも思ってしまうのは私だけだろうか。

そのような職業訓練現場を横目に見つつ、モノを作る喜びというエッセイを読んでいたら遠い過去の名工たちの片鱗とも思われる一節が次のようにあった。「昔の建築物を解体して再構築する際に、瓦や柱、または鑄造の隠れた一部に職人が刻んだと思われる『銘のようなもの』を発見したとき、その建造にかかわった職人たちの意気込みや思いを子孫や後世にそっと伝えようとする、健気で遠慮深い職人の思いをそこに見たようで、同じ職人として深い感動を覚える」とあった。このようにモノづくりの最大の楽しさは、立派な製品を作ることへの達成感や満足感を味わうのはもちろんだが、未来へのメッセージとしてそっと自分の足跡を残すことにあるのかもしれない。

さて、その数少ないモノづくり系といわれる金属加工科にプレス加工の実習があるが、この訓練がど

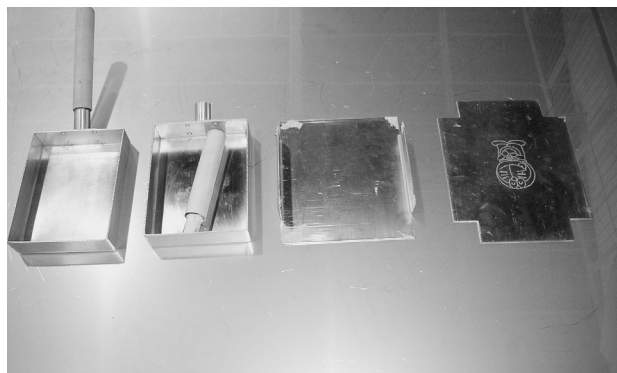
うにも訓練生に人気が悪く、何とか工夫できないものかと思案しつつ居酒屋で呑んでいたときのことであった。注文したダシ巻き玉子を食べてみて何ともいえずその美味しさに、思わず私は調理人にそのコツを尋ねてみたが、彼は「ふふん」と言ったきり相手には貰えなかった。そこで私は仕方なくそっと調理場を覗いてみると、ダシなどの調合にも「秘伝の工夫」はあるだろうが、どうやらその鍋に美味しさの秘密があるらしく、使い込まれたその鍋は所々に黒光りの色を発しているが、材質は銅製だと気が付いた。

そういえば、帝国ホテルの元総料理長ですでに鬼籍にある村上信夫氏が応召の際に「銅製の調理道具を油紙に包んで庭先に埋めて戦地に赴いた」と新聞記事で読んだことを思い出し、どうやら銅は高級調理には欠かせない金属であると感じた。そこで大阪の道具屋筋に行き銅製の調理器具を調べたり、あるいはデパートで行われている催事コーナーに足を運んでそれらの知識を仕入れて、私なりの考えをまとめて実践してみることにした。

それでも、本当に銅鍋で作った玉子焼きは美味しいのだろうか？と不安に感じた私は、訓練生に実習を行わせるに先立って試作品を作り、当時高校生だった息子の弁当にその試作鍋で焼いた玉子焼きを内緒で入れるように家内へ指示し、彼の反応を待った。帰宅後すぐに彼は「お母さん！今日の玉子焼きは旨かったわ。何で？卵の上等なものを買ったん？」と言うではないか。私は実験結果の良いことに喜々とし、早速にも訓練生に次のように提案してみた。「プレーキプレス実習の時間はただ寸法どおりに薄板鋼板を折り曲げることで機械の操作を習うのだが、曲げられた加工物はガス溶接実習され、そし

てスクラップとして捨てられる。そこには完成品が見えてこないことからモノや道具を作る喜びが見出しがたいと言う皆さんからの要望を考へて、実用的で一生使える銅製の玉子焼き鍋を作ろうと思いついた。しかしながら材料は訓練生負担になるがどうか？」と私の体験も含めて彼らを誘うと、全員が作ると言った。当時、銅板の2mm×1m×2mの値段は4万円だったから、鍋1つ当たりの単価は千円であるので訓練生への負担も少なく、自分のモノを作る喜びや更にはそれが生活道具であることに共感したようだった。

鍋の構造は市中に出回っている物と同様に至って簡単であるが、実際に製作してみると以下に記すようにその製作工程はいろいろと職業訓練として考えさせられるものがあった。



「展開から折り曲げ、溶接まで」



「コンタマシンによる鋸引き作業」

まず展開図を作成し罫書き線を入れ、薄板専用シャーにて切断後コーナーシャーで四隅を抜く。その後、バリをヤスリにて取り、ブレーキプレスで寸法曲げをして四辺を起こす。そしてTIG溶接で仮付けの後、共付けにて本溶接し、カラカミハンマーで成型を加え、軟らかくなった部分に見栄え良く鉋目を

つけることで加工硬化を与える。それと併行して、取っ手の製作は銅のパイプの切断とロウ付けだ。その後、取っ手と鍋本体をリベットによるカシメ接合した後、希硫酸で酸化した膜を洗い流す。その後は最終工程に入り、木製の柄を差し込んでセンターポンチを打ってドリルで穴明けをし、座ぐりをしてネジ止めした後、水性サンドペーパーの粗目から順に中目、細目を用いて研磨した後に出来上がりである。磨かれた鍋は黄金色に輝き、天日干しをしていると他科の訓練生から「キャー 何これ！ 綺麗ねー 私たちも欲しいわ」などの歓声が聞こえると、「3K訓練生」としては満更でもなく、にやりと笑い「モノづくりはどうだ！」とまるで俄名工になった気分だろう。このようにモノづくりは製作工程の楽しさもあるが、人は時にこの最後の工程を経た銅の持つ輝きに感動し、魅了されるのかもしれない。

職業訓練生は6ヵ月という限られた時間内に一応の技能・技術を身に付けて再び企業人として戻っていく。その束の間といわれる人生のエアーポケットの中で、再就職に焦りを感じるのか時折険しい顔つきになることもある。それは税金を使っただけの職業訓練だから辛いのが当たり前と言ってしまうまでもだが、せっかくモノづくり系の職種を選んだ訓練生たちであるから製造工程の一部としての溶接等の技術を応用させ、自らの生活道具を製品として作製させる。その中にはややもすると重苦しくなる彼らの訓練生活に潤いとモノづくりの面白さを体験させることで、彼らの生き活きた顔を垣間見たとき、この仕事をして良かったとつくづく思うのである。

蛇足ながら、勢いを得たわれわれモノづくり系はその後、ポリテクビジョンの一環として私のしごと館で夏休み親子モノ作り、あるいは兵庫県技能祭で銅製鍋の製作を来場者に体験して貰った。その際に、子どもたちが「お母さん、これで美味しい玉子焼き作ってね」と甘える仕草を見たとき、この子たちは技能の面白さを体感し、更にはその作られたモノが身近に存在するものだけに容易に理解でき、技能は素晴らしいものだと思われれば彼らが将来の技能者として育つことを期待して、だれもが食べる玉子焼きに付加価値をつける銅鍋の製作を職業訓練に取り入れて良かったと感じた。